



ブラジルと日本の架け橋として

白井 完さん 通訳・翻訳家・ナレーター

プロフィール：1969年2月5日ブラジル・サンパウロ生まれ、ブラジル、日本の二重国籍を持つ。NHK勤務、フリーの通訳・翻訳家・ナレーター（ポルトガル語・スペイン語・日本語・英語）。1992年サンパウロ大学の芸術学部映画科を卒業後、翌93年来日、95年松竹鎌倉映画塾卒業。TV番組制作、在日ポルトガル語新聞の記者を経て、99年より現職。西荻在住。

■日本からこんにちは!!



▲母国に日本の情報を届ける

「西荻は9年ほど住んでいます。以前は川崎にいましたが、仕事には不便だし、都心に住んでみたいという気持ちもあって。いろいろ探したんですが、西荻って今でこそ外国人が多くてカレーストリートがあったりエスニックなカンジですが、当時は外国人がほとんどいませんでした。アンティークの店が多いのが気に入って引っ越しました。住みやすい街ですよ」

白井完さんの名前は、日本よりブラジルの方で有名かも知れない。

というのも現在、NHKの海外向けラジオ放送のラジオジャパンで、日本語のニュースをポルトガル語に翻訳し、ブラジルに向けて日本を紹介する番組のパーソナリティを務めているからだ。

「所属はNHKですが、今はフリーの通訳・翻訳やナレーションの仕事がメインですね。音楽やスポーツ、映画関係の通訳・翻訳です。今年がボサノヴァ誕生50周年、来年2008年は日伯交流年にあたりますので多忙に過ごしていますよ」

『日伯交流年』とは、1908年に初めて日本からブラジル移民の船が旅立った年を記

念して、小泉元総理がブラジル訪問したときに日本・ブラジルの友好を記念して定めたものだ。

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/brazil/jb2008/index.html>

白井さんはブラジル生まれの日系二世、日本には映画の勉強のためにやってきた。しかし、白井さんにとって日本は幼い頃からの憧れの父祖の地ではなかった。

■ぼくはいったい何者なんだ!!

白井さんの両親は戦後フロンティアを目指した移民だ。1958年に父・久雄さんが、1966年に母・ノブ子さんが、別々に中南米へ渡った。

二人はブラジルで出会い、結婚をしてサンパウロに居を定めた。

だから、白井さんは日本を直接見ることなく育った。

いや、両親から日本がいかに美しい国か、日本人がいかに美しい心映えをしているかを聞かされて育った。久雄さんは70年代から毎年日本に行っていて、ブラジルより進んだ日本を見てくる。ブラジルに比べ開発が進んだ日本を見て、美化したのだと白井さんはいう。

「そんなに日本がいい国なら、なぜ日本を出てブラジルに来たんだ、いまはブラジルに住んでいるのに日常会話程度以上のポルトガル語を話さないのはなぜだ、って」

両親は、自分の子どもに正しい日本語を教えようとしたが、白井さんは少年らしい正当性をもって、拒否した。自分はブラジルで生まれたブラジル人なのだ。

「日本語なんてって思ったんです。でも、ぼくは目も髪も黒い。ぼくはブラジル生まれでポルトガル語しか話せなくて、考え方もブラジル人なのに、非日系のブラジル人がみたら『日本人』なんです。ぼくはいったい何者なんだ、とずっと考えていました」

■日本映画との出会い



▲イベントの通訳もします

日本でブラジル映画が公開される機会は少ないけれど、ブラジルは映画産業が盛んな国だ。

http://www.cinemabrasil.info/jpn/program/default.html#prog_c

今でこそ、ハリウッド映画のポスターばかりがブラジルの映画館を飾るが、かつては日本映画専門の「日本映画館」がいくつもあった。

日本からの移民が多く住む、サンパウロの東洋人街、リベルダーヂ地区には日本映画館が四館もあったという。

白井さんもここで日本映画を観た。「衝撃でした。小津安二郎や黒澤明や成瀬巳喜男の撮ったスクリーンに現れる昭和30年代の日本の風景を見て『懐かしい』気持ちになりました。そのときはじめて、自分の中の日本人の血を感じたんです」



↘

白井さんは日本映画に夢中になった。日本語にも興味を抱き、積極的に学ぶようになった。日本という国への興味を抱き、実際にいってみたい、見てみたい。

長じて、大学で映画の勉強を始めた白井さんの胸には、そんな思いが強くなっていた。

■ やっぱりぼくはブラジル人だ!!

フィルムに焼き付けられた日本の姿を求めて、93年、白井さんは来日した。

高鳴る胸をすぼめたのは、パブル後の日本。

小津や黒澤の日本は、もはやどこにもなかった。

「ぼくの知る日本の風景はなくて、え？ えええ？ って」

さらに、メンタルでもうろたえることになった。

考え方や感じ方、感情表現が違うのだ。

「日本人は、ぼくたちブラジルやスペインなんかのラテン系から見ると、アレでしょ？ 感情を表に現さないですよ。何を考えているかぜんぜん分からない」

とくに納得がいかなかったのが、既に使いこなすようになった、会話中にまざる無意味な指示代名詞。『アレでしょ』。

「アレってナニですか、はっきりいってください！」

問いつめていたと白井さんは笑う。あいまいにして強く当たらない、腹におさめてあえて言わない、という日本のコミュニケーションの側面は、とても理解がたいものだったのだ。

「日本に来て、やっぱりぼくはブラジル人なんだと確認しましたね。アイデンティティ・クライシスはすっかり消えましたが、ホームシックになりました(笑)」

ブラジル人としての自己認識を深めたというのに、ブラジルの友人からは『おまえ、日本人ぼくなったなあ』と言われるそうだ。

でも、もう自分が何者か悩むことはない、白井さんはさばさばした表情でいった。

■ 日本人にブラジルのことをもっと知って欲しい

ブラジル人・Kan Shiraiの視点で見ると日本は面白い国だった。

かろうじて、下町に残されている映画で見た日本の面影を追って、白井さんはときどき、東京のまちを歩き回って写真を撮って過ごしている。

「この間は、ものスゴク間違ったスペイン語の名前をつけた飲み屋を見つけて友人と大笑いしましたよ」

そして、愛する祖国のことを日本人があまりにも知らないことを知った。

そのことは、ショックだった。ショックだったことに対してまた自分が日本で異邦人であり、ブラジル人である自分を強く意識させた。

「ブラジルにはたくさんの日系人がいて、『働きもの』『頭がいい』というように評価は高い。日本もすぐれた技術や豊かな自然というプラスイメージで見えています。でも日本人はブラジルに対して、どうでしょうか？」

治安の悪さ、職業的誘拐、環境破壊、サンバ、ボサノヴァ、サッカー……。

「マイナスイメージも確かに多い。治安は悪いです。ぼくが子どもの頃からそうだった。でも、それだけじゃない。壮大な自然、おおらかで陽気なひとびと、そうですね、悪いところもいいところもあって、全部でブラジル。ぼくのだいすきなふるさとなんです」

■ ブラジルと日本の架け橋として



▲ボサノヴァ生誕50周年行事

来年は日伯交流年、今年にはボサノヴァ生誕50周年でブラジルから多くのミュージシャンが来日し、またブラジル映画祭も例年になり盛り上がりを見せている。

『ボサノヴァの生き証人』ともいわれるカルロス・リラ、ホベルト・メネスカルの2人が来

日したとき、通訳を務めた。

「日本にいるからこそですね。『ボサノヴァの生き証人』とお話できるなんて。これからももっと日本語を磨かなくては。ぼくの日本語はまだまだですからね。両親が正しい日本語を教えようとしたときに学んでおけば良かったですよ」

また、大好きなミュージシャン・坂本龍一と偶然だが言葉を交わすこともできたのも日本へ来た余録。

「日本にきてよかった!! と思った2番目くらいのウレシサです。通訳の仕事することで、ブラジルの素晴らしい人と会えて、その人たちを日本に紹介するお手伝いができる。それがいちばんうれしいことかな。映画の夢は棄てていませんが、今は、通訳や翻訳、ナレーターという仕事を通して、ブラジルと日本のかけ橋になれば、と思っています」

そうそう、憧れていた日本の風景には映画『ALWAYS・三丁目の夕日』で出会えたようだ。

(文：富樫明美)